

サックス



このソサエティで歌う筆者=9月26日、東京・かつしかシンフォニー・ヒルズで
「まだ伸びたい。9月に始まることで誇りに思つしません。歌を聴きに来てくれる方が多いです。今年のツアードラマは全国八千四百六十回に及んだ。歌を始めた。歌手としても、年三、四十回以上だった。歌を重ね、連載を機に数えてみると、今年のツアーガ�始まるまでに一千一百五十年間の自分の変化をよく知つた。」
たただ東日本大震災があり、被災地で歌つた。この間に故郷の宮城県女川町も震つた。その曲との出会いから四半世紀が過ぎた。歌の持つ力を改めて感じた。
「勇気があれば夢はいつまでも實現できる。」勇気がないと、聴く人を励まし、自分もこの歌に元気づけられてきた。
「はじめの空」は、作詞家松井五郎の空」と「恵み」の一曲だ。
トのライナップに加えた。「はじめの空」は一枚目のシングルの一曲も、コソサエツクスを、少し本格的に練習し始めた。十ほど前に買ひ、時折吹いていたアルトサックスを、端的には言えないけれども、「いい」だ。
「なぜ吹くのか。端的には言えないけれども、吹いていて、サックスは人間の声に近い楽器じゃないかと思つ。吹いているときは歌つている気分になれる。」
「いま、自分は六十四歳。」われら青春時代、吹いていて、サックスは言えなければいけない」といふ。

①



2015.10.13 東京新聞・夕刊

字は中村ひぐる。(構成=仁賀奈雅行)
なかむら・まことじ 俳優。歌手。題

◇

うと思つていて。聴く人の力になれるよう、歌い続けよ
けての君なんだ」と激励する。夢を持ち続
すか」と問い合わせ、「いまの君はじめ
負けないうつに夢を語る言葉はあるま
た」「はじめの空」は、「昨日の自分に
いる松井さんにお願いして作つてもうつ
ての君なんだ」と思わせてくれる歌だ。
どで、歌の持つ力を改めて感じた。
たただ東日本大震災があり、被災地で歌つた。この間に故郷の宮城県女川町も震つた。その曲との出会いから四半世紀が過ぎた。歌の持つ力を改めて感じた。
「勇気があれば夢はいつまでも實現できる。」勇気がないと、聴く人を励まし、自分もこの歌に元気づけられてきた。
「はじめの空」は、作詞家松井五郎の空」と「恵み」の一曲だ。
トのライナップに加えた。「はじめの空」は一枚目のシングルの一曲も、コソサエツクスを、少し本格的に練習し始めた。十ほど前に買ひ、時折吹いていたアルトサックスを、端的には言えなければいけない」といふ。

取り入れさせてもらつた。
の一環で、今年のコソサエツクスもそこ
が必要だ、と思っていて。サックスをかけていると
フォーマーとして常に磨きをかけていた。

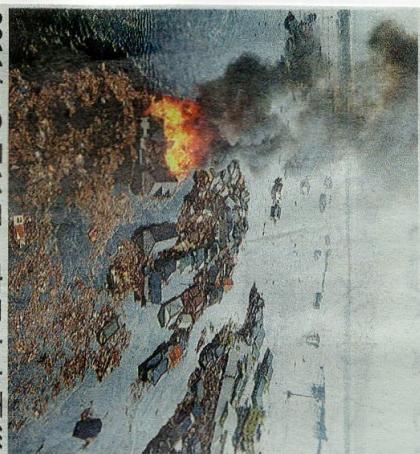
震災翌日だったか、家の屋根につかまつて沖へ流れさせていた人が救助されたところ、「ユースが流れた。」女川の人らしい「い」とテレビを見ていた娘が言つ。これで小野寺君に避難した小野寺武則君だった。その後、仙台に避難した小野寺君から連絡があり、地元の様子がわかる。町は壊滅したじつ。

想にできなかつた。人の連絡はなかなか取れなかつた。被災地への通信は途絶えて、親戚や友人への連絡はなかなか取れなかつた。

金華山に渡る連絡船が出ていく。都心へ戻る車の中で、テレビのニュースをワクセグで視聴し、震度やマグニチュード(M)などの情報も入ってきた。自分は小学四年生の時に、チリ地震による津波を経験している。震源地と地震の大さきから、「これは絶対津波が来る」とは思つた。しかし、さすがにあります。津波が押し寄せるとは、予想だにできなかつた。

金山に渡る連絡船が出ていて、金華山が震源地だといつてた。町の港からは、自分の故郷である女川町の真正面には、石巻市の島。いの沖が震源地だといつて、金山は牡鹿半島の沖に浮かぶ宮城県金山の真横だといつてが分かってきた。心したのが、震源地が東北沖、しかも「ホントかなあ」と思いながらも安たらしくなつかった「と平安」と話す衆電話から連絡が取れた。妻は「流れはた」だった。たしかに金山は震源地だ。

2011年3月11日、東日本大震
が発生し、大津波で流され
くの家屋＝宮城県名取市で



震災
一

自宅には、駅の外にあつた公

うとうと工事中で、ホームの上に鉄骨のよいつなものが積まれていて。落ちてからもかしへない状態だ。落としたててからもかしへない状態で置かれていたので、まかりに背筋がくじけてしまは…。間違えば…。

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分。ある大震災が起きた時は、電車の中に入った。京王線の東府中駅と府中競馬正門前駅を往復する電車の中で、三宅裕司さんと「ゾーヨーピース」「ヒーロー」の簡単な単発のドラマを撮影していた。揺れが襲ってきたのは、ちょうど電車が東府中に停車していた時だった。

• ८

2015.10.14 東京新聞・夕刊

震災②



2011年3月、女川町の市街地に散乱する家の残骸と壊れた列車

川に着いた。午前二時ころ、ワゴンボックスカーに食料品などを積めるだけ積み、東北道を北上した。仙台で高速を降りて、女川を目指す。道路が冠水していたり、さまたま通行規制などもあるて、いつもよりも遅い時間がかかり、午前十時ころ、女川に着いた。そこは集落はなに浦に面した浦宿といつ集落だった。浦宿へ引き返った。町の様子を見た上で、浦宿へ引き返す同級生、高橋正典君を訪ねた。工場を経當する同級生、高橋「どうかまばし工場を経當後は、女川町に散らばるところをやつてくれ」。そう頼まれた

。何だこれは。
木造の家は押し流されて跡形もない。
建物も引き波で横倒しになってしまっており、辺りはがれきで埋まっている。何の目印もなくなると、自分の家がどこだったかでもわからなくなってしまう。初めてかも知れないよつになると、坂から見えていた建物も引き波で横倒しになってしまっており、辺りはがれきで埋まっているはずのコロコロの木造の家は押し流されて跡形もない。

には、そのかけらもなかつた。町が鮮明に残つていて。坂から見える町の中には、港がにぎやかだったところの頭の中には、心に家々がひじめきあつていて。自分の故郷・女川町を襲つた巨大な津波。親戚が三人亡くなつた。一刻も早く現地へ行こうとした。思つに任せ、みやべ一ヶ月以上たつた。四年四月十四日、現地へ行くことができた。

③



2015.10.15 東京新聞・夕刊



震災



解体されるといふと海に血で染まる。オニがどの魚が集まってきた、釣り糸を垂れるどこ入れ食いになつた。エサは何でもかまわなかつた。漁船は港に着けの時、船尾に一つあつた。岸壁にはじけていた。かう接岸し、岸壁にはじけていた。のほじの幅は八十キロ位しかなかつた。水死体がて来るところがある。「水死体がめ、飲みに行つた乗組員が千鳥足で戻つた。がひりへり見に行つたのを覚えてる。あがつた」「ヒトヒツ叫び声で、おかしくへんは、まだ子どもだった自分には非常に刺激的な場所だった。

には非常に刺激的な場所だった。とにかく港は、まだ子どもだった自分があがった。「一ひとじり見に行つたのを覚えてる。」水死体がて来るところがある。」乗組員が千鳥足で戻つたのはじいの幅は六十センチくらいをかけた。ついで岸壁にしがみつきながら接岸し、岸壁にはじいをかけた。漁船は港に着ける時、船尾一つあった。都会の人があまず目でじないものがもう

クジラの船にクジラが飛び入り
光景だ。船の両舷にクジラが飛び入り
けたチヨコレー色のヤツチ
ヤーボートが列をなして入って
くると、港にサメが鳴り、
見物に出掛ける。解体場はスロ
ープになっていて、チエード

自分は一九五一年一月一日、宮城県女川町で生まれ、高校卒業までここで育った。カツオ船やマグロ船がひっきりなしに出入りし、入港するのに順番待ちが必要なほどの港町だった。当然、乗組員相手の店も増える。人口二万人口弱の町なのに飲み屋が二百軒以上、軒を連ねていた。女川湾は水深が深くて、昔は軍港だった。そのせいか巡視船などもよく見かけた。外国の船も多く、中でもソ連當時の船が結構、立ち寄っていた。そんな港で、鮮烈に覚えていたのが、港にあつた日本水産のクジラの解体場の時だ。

2015.10.17 東京新聞・夕刊

